土地の古老の三河地震被災体験談から学ぶ、地震・災害のしくみと防災のあり方

歴史災害教訓伝達プロジェクト

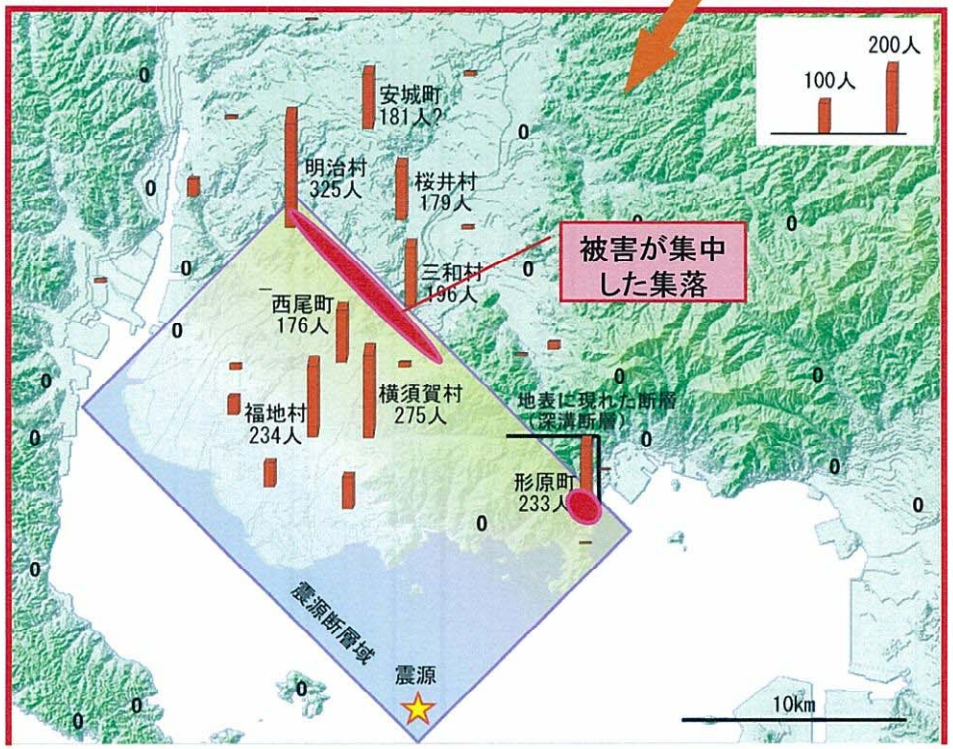
～1944東南海・1945三河地震

地域の被災体験を視覚化し、住民間で共有する試み

～地域の災害イメージを豊かにすることで、防災へ！

1945年三河地震

- 死者2306人
- 第2次世界大戦末期の報道管制下において、具体的被害報道が制限された。写真も少ない。

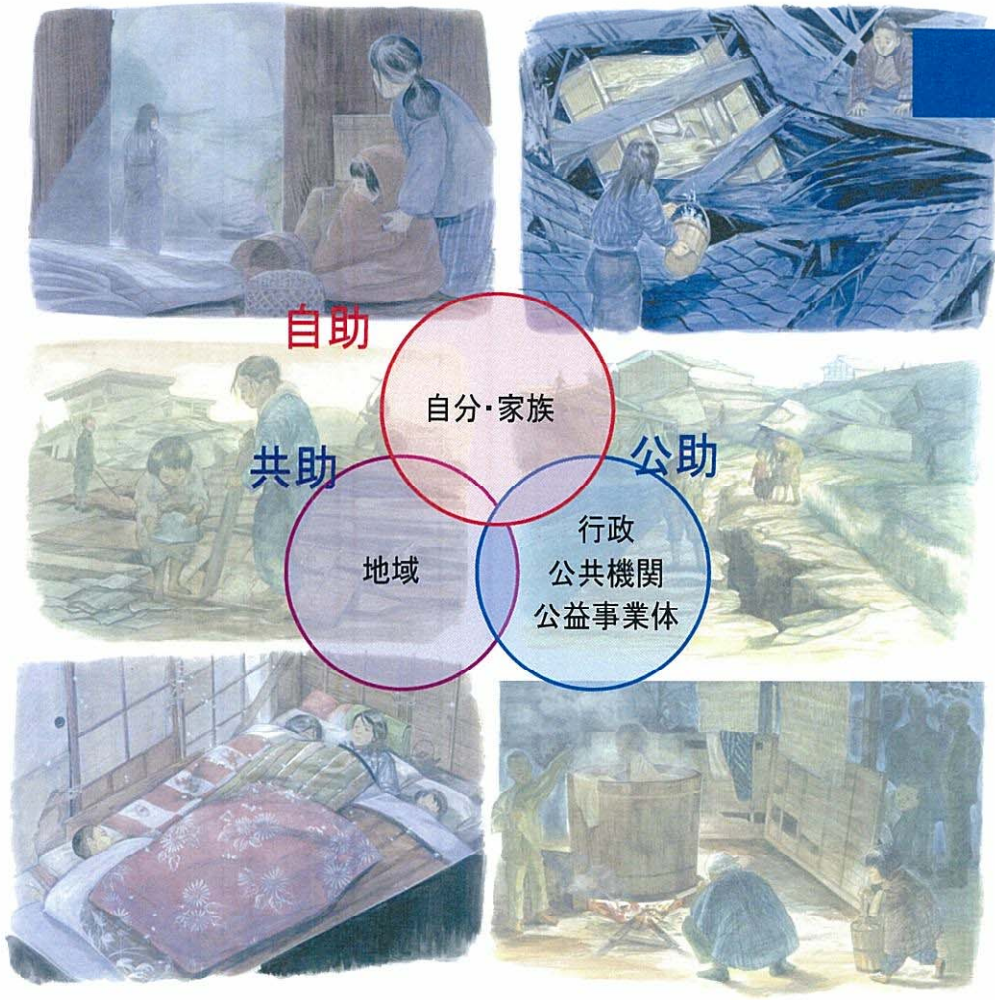


再度の震災も何ぞ
試煉に固む特攻魂
敵機頭上、逞しき復舊

決戰に手を拔くな
比島思へば增産一途

吉野吉激
知事

地域の災害体験を子どもたちに継承して、子どもたちの防災マインドを育てる



視覚化された地域の被災体験を、次世代を担う子どもたちに伝えていく

①教育プログラム

②教材

特徴の異なる3つの小学校（昔からの地域・新旧混合地域・外国人地域）で実践

２つのプログラムの実践（１）

１．２時間で学べるプログラム（複数クラスの児童向け）

1時間目

1．地震って何？

動画や写真を使って地震被害、特に過去の災害での地域被害について説明をする。

2．地震が起こると何が大変なの？

被災者の体験談を、司会者との対談形式によって、話を聞く。

2時間目

3．さまざまな防災の知恵を体験しよう！

班にわかれて３つの屋台をまわりながら防災の知恵を学ぶ

後日（総合的学習の時間）

4．復習しよう！

体験談を復習し知識の定着化を図る

➡ 桜林小学校（新旧住宅地混在）・祥南小学校（ブラジル人家族等）で実施

２つのプログラムの実践（２）

２．１年間にわたるプログラム（１クラスの児童を対象）

2．地震ってなに？

動画や画像を使って地震と被害について説明をしてくれました。

3．地震が起きると何が大変なの？

被災者のお話を聞きました。司会の心理学の先生が、体験談の絵をもとに質問しました。

4．地震について復習しよう

被災者の方の話をもとに作った手作りドリルを答えながら、お話をふりかえりました。

5．みんなで答えあわせをしよう

みんなで答え合わせをしました。「地震だ！」という合図で机の下にもぐりました。

７月１１日の２時間授業（キックオフ）をきっかけに、１年間の試みがはじまった

総合的な学習「防災学習」年間プログラムを構想する

①問題を見つける → ②追究する → ③表現する → ④自己を考える

自分の問題としてとらえる

鈴木敏枝さん 沓名美代さんへ

このたびは地震についてくわしく教えていただいて、ありがとうございます。私達は生まれてから大きな地震は体験していません。でもお二人のお話を聞いて地震の事が前よりも知ることができました。地震がどんなにこわいか。安城市は63年も大きな地震が来ていません。なのでいつ来るかわかりません。私は地震が来てもよいように準備をして何をすればいいか頭の中に入れて自分の身を守りたいです。地震の事を教えていただいて本当にありがとうございました。

問題解決のための調べ学習

「地域」学習

・聞き取り

・マップ作り

宇頭茶屋町

・余震で田んぼを耕す牛が立てなくなって人の手でやった

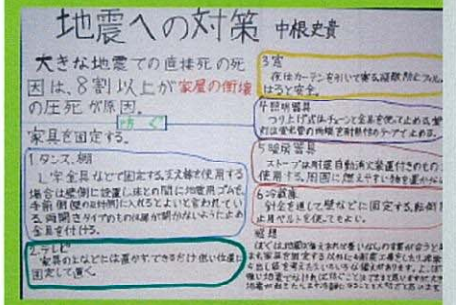
・壊れた家もあり、神社では灯ろうやこま犬が倒れた

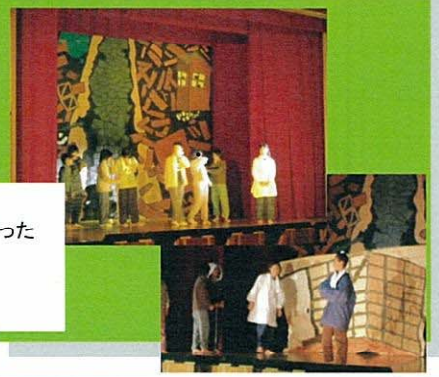
・家が全壊して、外にわら小屋を造って生活した

・地震からお風呂に入れず髪の毛にしらみがわいた

まとめ作り

学芸会の劇での再現・発信





行動目標をもつ

三河地震被災体験談からの想い

年間プログラムの実現にむけて（例）

1単位時間の授業を積み上げていく（帰納的）

1時間の指導案作成

目標

①学習課題の設定

「家に一人でいる時に地震がきたらどうするか」

②かかわり合う場の設定

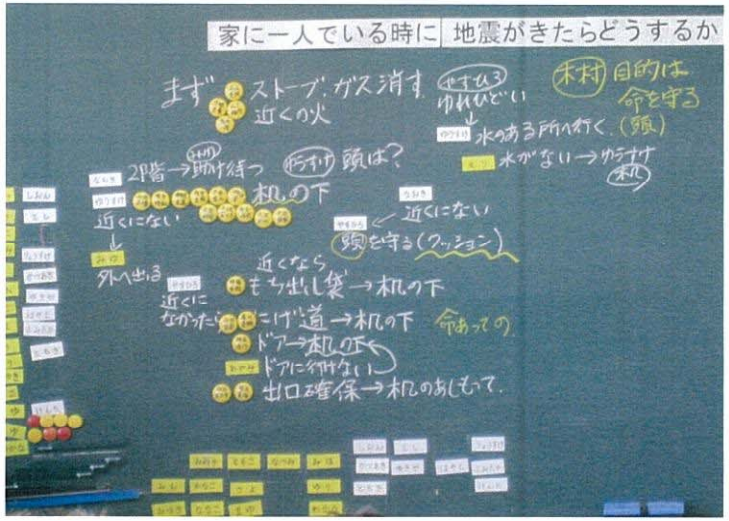
自分が調べたこと考えたことと、友だちのもっているものとのすり合わせ

③自己に返す場の設定

具体的な行動がわかる

- 机の下にもぐる
- 出口確保
- 頭と足を守る

評価



第６学年　総合的な学習指導案

平成２０年１２月１２日（金）４・５校時

指導者　岩　月　佐江子

木　村　玲　欧

１　単元名　　地震に負けない

２　単元目標

・地域の被災体験を聞くことで、防災への関心をもち、自分なりの課題を見つけることができる。（問題を見つける力）

・自分の課題を解決するために、資料で調べたり、調査活動をしたりし、地震への備えに生かすことができる。（追究する力）

・追究したことをまとめ、みんなの共通の認識とすることができように発表し、これからの身近な防災のあり方を提案することができる。（表現する力）

・単元を通して、これから起こる災害を自分ｔ
できる。

３　単元について

（１）児童の実態について

３年生からの総合的な学習で防災を扱うの
４回の避難訓練時の事前指導、事後指導の中
災害発生時の行動の仕方を学習してきてい
時の引き取り訓練では、注意情報が発表さ
や引き取りの手順の学習をしてきている。し
が自分にも降りかかってくるという実感が
防災への意識は育っていなかった。

今回、単元の導入で、名古屋大学災害対策
の心に響く形で提供することが可能になり、
ができた。その後、必要な情報を集め、まと
いを蓄積してきている。まとめの段階では、
わらせ、考えや感覚のずれをお互いが感じと
これから自分がどうしていくかを明確にする

（２）単元構想図（別紙）

（３）抽出児について

抽出児Ａは、どの授業に対しても真面目な取
も、毎時間、真剣な表情が見られる。しかし、
いるかとか具体的にどんな行動をするのかが
他の子と関わり合う中で、自分の気がつかな
がる発言を引き出したい。

４　本時の学習指導（３７，３８／４２）

（１）本時の目標

３７／４２（４校時）

・専門家の話を聞くことにより、疑問を解明し被災時の人間の心理や行動を知る。

３８／４２（５校時）

・被災の場面を設定し、その場の行動について、これまで学習したことや４校時の話と結びつけて考え話し合うことにより、これからの防災の具体的な行動を起こすきっかけができるようにする。（自己を考える力）

（２）学習指導過程（４校時）

学　習　活　動	教　師　の　支　援
１　本時の学習問題を確認する。 大きな災害が起きたとき、私たちはどうなるのだろう？	・専門家から、実証的なデータに基づいた話を聞くことで、被災時の精神状態にも考えが及ぶようにする。
・「失見当」とは 「大きな災害が起きると、強いストレスを受ける。そのため、頭が真っ白になり、あわててしまい、まわりで何が起こっているか、自分が何をすべきわからなくなる。」	・三河地震の被災体験談から、地震発生後、毛布にくるまったまま、震えて何もできなかった実話を紹介することで理解しやすくする。
・新潟県中越地震の激しい揺れの中、被災者は何をしたか 「動くことができなかった・あわてずにじっとしていた」を合わせると５６％になる。	・最近起きた地震の具体的なデータを示すことで、「失見当」はだれでも置かれる精神状態であることを知らせる。
・この時期の特徴は ・なぜ起きてしまうのか ・失見当を乗り切るためには ・失見当をなくすには ・実際に災害が起きたら	・失見当をなくすことはできないが、その状態を浅くしたり、時間を短くしたりする努力はできることを伝え、実際の災害が起きた時の具体的な行動を考えることにつながるようにする。
３　振り返りをする。 ・わかったこと ・感想 ・生かしたいこと	・振り返り書くことで、学習のまとめができるようにする。

（３）評　価

・専門家の話を聞くことにより、疑問を解明し被災時の人間の心理や行動を知ることができたか、授業中の様子や振り返りから判断する。

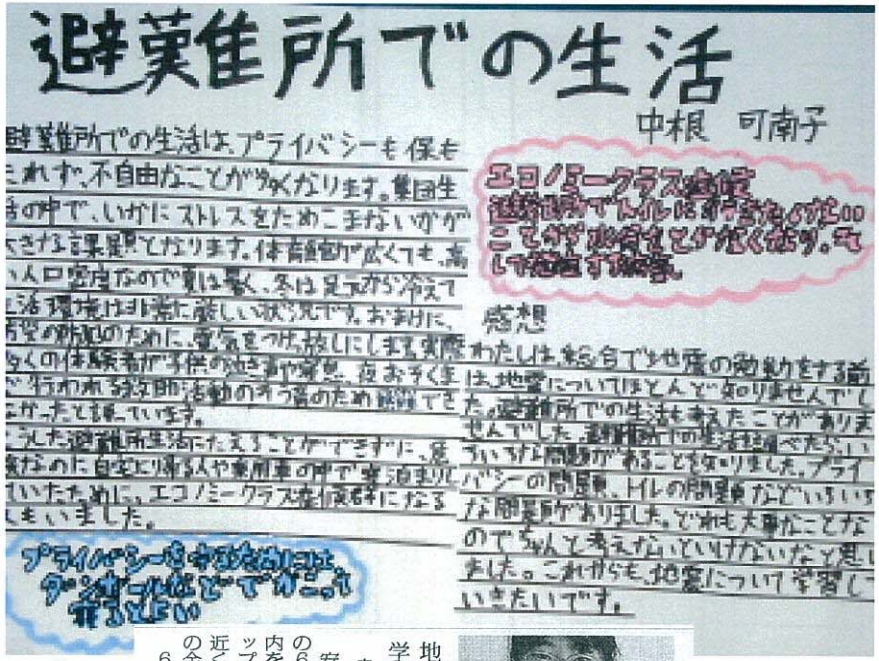
（４）学習指導過程（５校時）

学　習　活　動	教　師　の　支　援
１　本時の学習問題を確認する。 家に一人でいる時に地震がきたらどうするか	
・机の下にもぐる 机はある？　２階なら？　ない時は？ なぜ？	・同じような意見を続けて出させることで考えを整理できるようにする。
・火を消してから どういう時に？　もぐる前に？	・自分の意見に対して、他の子から質問を出してもらうことで、考え直したり考えを深めたりできるようにする。
・脱出口を開く 一番に？　動けなかったら？	
・持ち出し袋を持つ すぐに持てる？　どこに置いておく？ 取りに行ける？	・疑問や迷いが出てきた時は、専門家のアドバイスを聞いて、次に進むことで、実際の行動に結びつく学習ができるようにする。
・おさまったら外に出る ドアはあく？　落下物でけがをしたら？ 余震がきたら？　落下物にはどんな物が？ 出られない時は叫ぶ？ 外は歩ける状態？ どこに向かう？ 家族は？	・これまでの学習のまとめにつながるように、子どもが見落としていることは気がつくように助言する。
２　振り返りをする。 ・すぐにやろうと思った地震への備えをまとめる。（家族に伝えたいこと） ・被災時の行動をまとめる。 ・授業の感想をまとめる。	・具体的な行動として書くように助言し、家族を巻き込んだ地震対策が進むようにする。 ・感想は学習内容に対しての考えや思いを中心に書くように促す。

（５）評　価

・被災の場面を設定し、その場の行動について、これまで学習したことや４校時の話と結びつけて考え話し合うことにより、これからの防災の具体的な行動を起こすきっかけができたか、発言や振り返りから判断する。

みんなに危険な場所を気づいてほしい
（中根可南子）


避難生活での生活

中根　可南子

避難生活での生活は、プライバシーも保もれず、不自由なことが多くなります。集団生活の中で、いかにストレスをためこまないかが大きな課題となります。体育館が広くても、高い人口密度なので夏は暑く、冬は足元から冷えて生活環境は非常に厳しい状況です。おまけに、防犯のために、電気をつけ、放しにします。実際、多くの体験者が子供の泣き声や騒音、夜おそくまで行われる救助活動のお音のため睡眠できなかったと言っています。

こんな避難所生活たえることができずに、家なのに自宅に帰ったり車の中で寝泊まりしていたために、エコノミークラス症候群になる人もいました。

エコノミークラス症候群
長時間でトイレにも行けないので血の流れが悪くなり、血管の中で血が固まってしまう。そして死亡する病気。

感想

わたしは、給食で地震の勉強をする前は、地震についてほとんど知りませんでした。避難所での生活も考えたことがありませんでした。避難所での生活を調べたらいろいろな問題があることを知りました。プライバシーの問題、トイレの問題などいろいろな問題がありました。どれも大事なことなのでちゃんと考えないといけないなと思いました。これからも、地震について学習していきたいです。

プライバシーを守るためには、ダンボールなどでかこって作るとよい

毎日新聞（三河版）1月29日

地震防災マップ 学区歩いて作製

安城・志貴小6年生

安城市立志貴小学校の6年生27人が、学区内を歩いて地震防災マップを作った＝写真。近く全校児童や学区内の全世帯に配る。

6年生は1学期から総合的な学習の時間などに、三河地震（1945年発生）について学習。名古屋大災害対策室の木村玲欧准教授らの指導で、当時の体験者に話を聞いた。それに沿った劇を作り、昨年12月に学区住民に披露した。

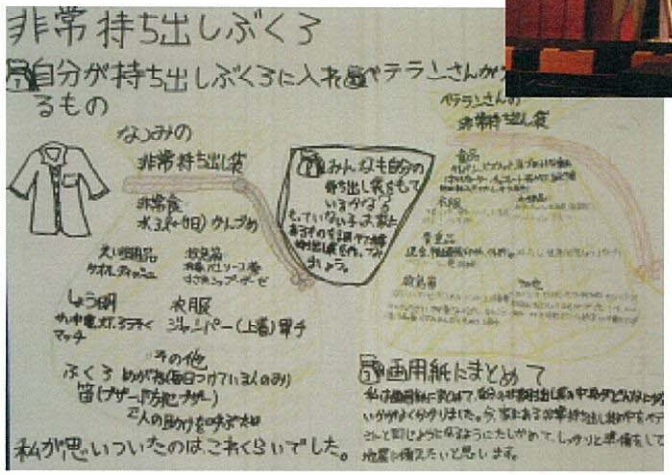
地震防災マップの作製は、その一環。地震発生時の心構えや防災の備えを学び、学区内の実情を調べた。危険な所、広場、役に立つ所、さらに防火施設や水のある所、公共の場所などを細かく点検した。

それらの数十カ所を地図上に番号で表し、それぞれの写真も撮って載せた。また、危険な場所と安全な場所を色分けし、一目で分かるマップに仕上げた。A2判で、約500部を印刷した。【安間教雄】

6年生が作成→町内会でチェック→町内に配布

勉強した地震のことを伝えよう（酒井夏海）

毎日新聞11月15日
（学芸会当日朝刊）



被災姉妹を招待

3（震災）関連死とはどういう死か。

・肺炎　・心不全　・心筋こうそく　・呼吸ふぜん　・脳こうそく

震災の直接的な害ではなく間接的な害による死亡例の総称。火災や倒壊などの直接的原因でなく病気、ストレス、発作、自殺などの間接的原因による死亡例を指す。

4（震災）関連死の原因はどのようなことか。

・病気
・ストレス
・発作
・自殺
・呼吸不全
・心筋こうそく
・心不全
・肺炎

関連死を防ぐためはどうすればいいか。

・ストレスがたまらないように、せまい中でも少し動く
・大切な人が死んでしまっても、大切な人の分も生きようという心気持ちをもつ。
・過労死にならないように、体力をつけておく、十分に休む
・食料不足をふせぐために非常食を用意しておく

三河地震を創作劇に

安城市立志貴小学芸会で6年生 被災者の体験談聞き

安城市立志貴小学校の6年生27人が13日の学芸会で、犠牲者2306人を出した1945年の三河地震の創作劇「地震に負けない」を披露した。被災者から当時の体験談を聞き、劇にした。

三河地震を被災した鈴木敏枝さん(79)と沓名美代さん(75)の姉妹から、7月に体験談を聞いた。2人は、大地が強く揺れた恐ろしさをはじめ、家屋の倒壊や死傷者の発生による混乱と不安、余震が続く中での不自由な生活などを生々しく語った。

劇では、ナレーターが三河地震の史実や記録を語り、姉妹役の2人が何度も登場して当時を振り返った。そして、地震の発生から被害の模様、被災者の生活などを約30分かけて演じた。2学期から配役を決め、けいこを続け、舞台装置や照明、音響、衣装などすべて自分たちで手がけた。

児童たちは、東海地震などに備え、聞いた話を実際の防災に役立てようと、2人の体験談を冊子にまとめ、学区の防災マップを作った。体験談に沿った劇を創作した岩月佐江子教諭は「被災者の体験談なので迫力が違い、子供たちへのインパクトも大きい。劇の上演で子供たちも一段と身につくのではないか」と話している。

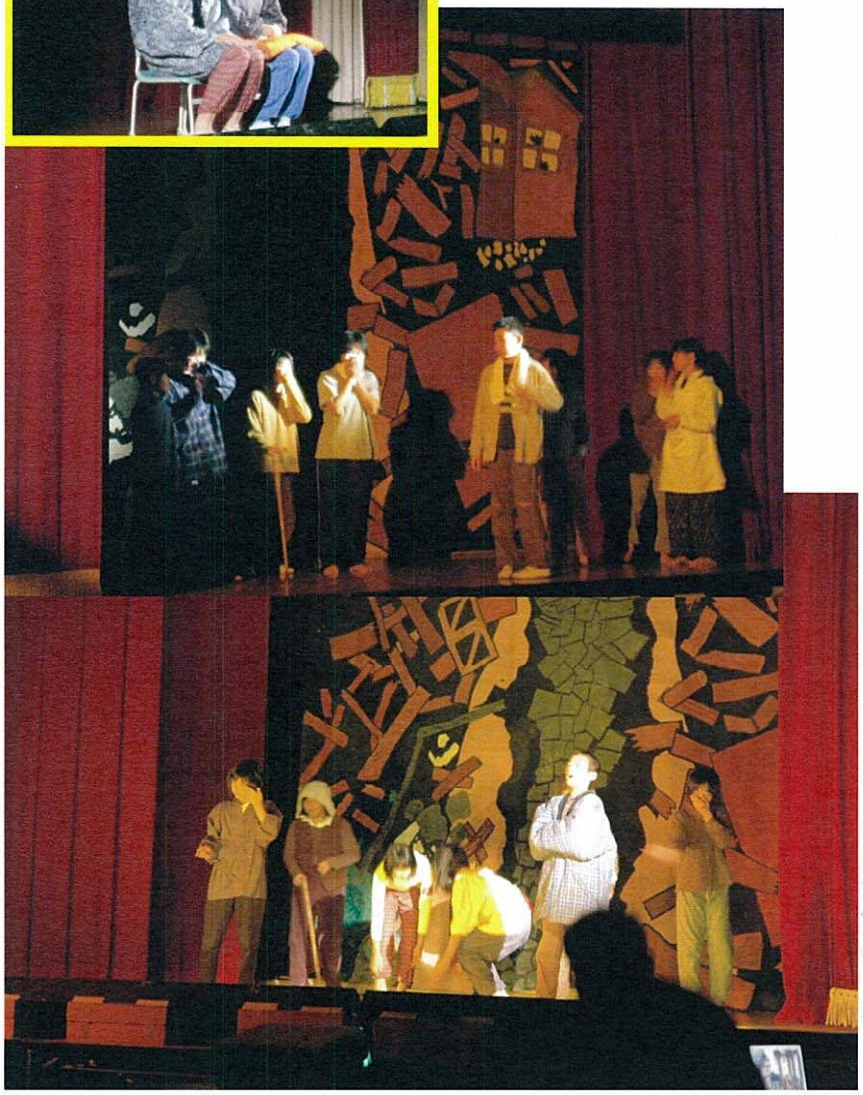
15日午前8時半～正午に、保護者や地域住民を招いて上演する。

【安間教雄】

「地震に負けない」を演じる志貴小学校の6年生

地震に負けない！（11月15日志貴小学校学芸会）

劇は被災姉妹の想起のかたちで進行する

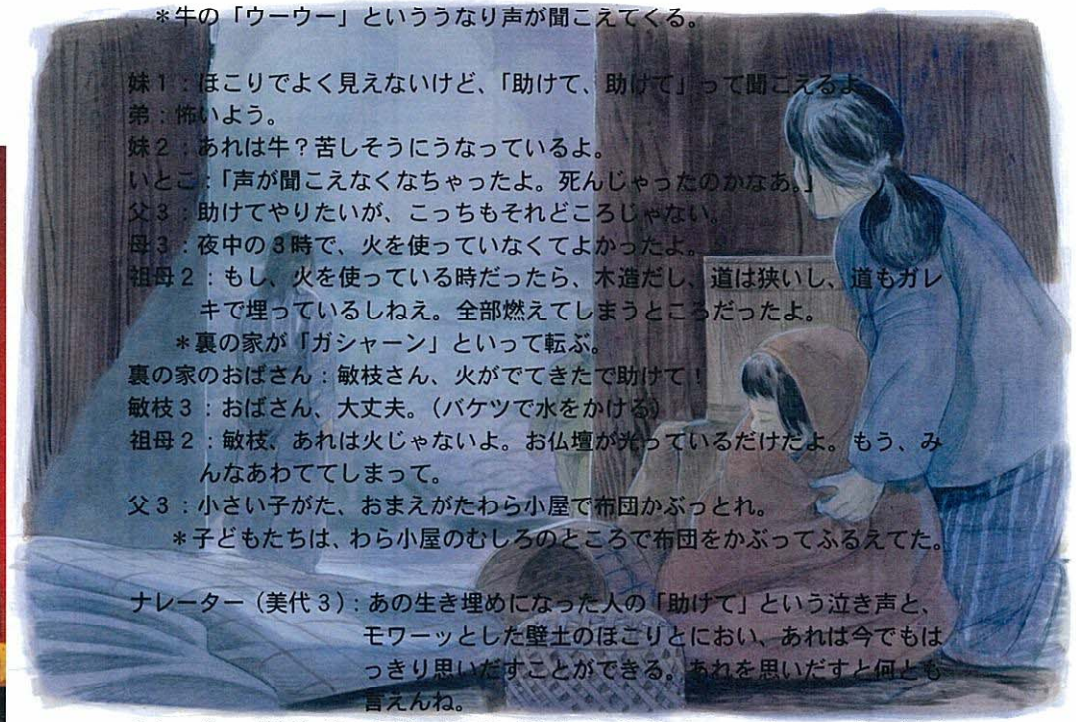


４場面：三河地震の発生

ナレーター７：昭和２０年１月１３日　午前３時３８分　三河地震が発生しました。おばあちゃんといとこは長屋、わたしたちは横屋の座敷に寝ていました。
効果音：ゴー、ドンドンドンドンガーン、ガッシャーン

父３：外へ出なあかん！
祖母２：みんな大丈夫かい。
美代２：ほこりがすごくて、目が痛い。
敏枝３：ほこりがすごくて、息ができない。
母３：壁土のほこりがすごいねえ。みんな袖を口にあてて、なるべく吸い込まないようにね。

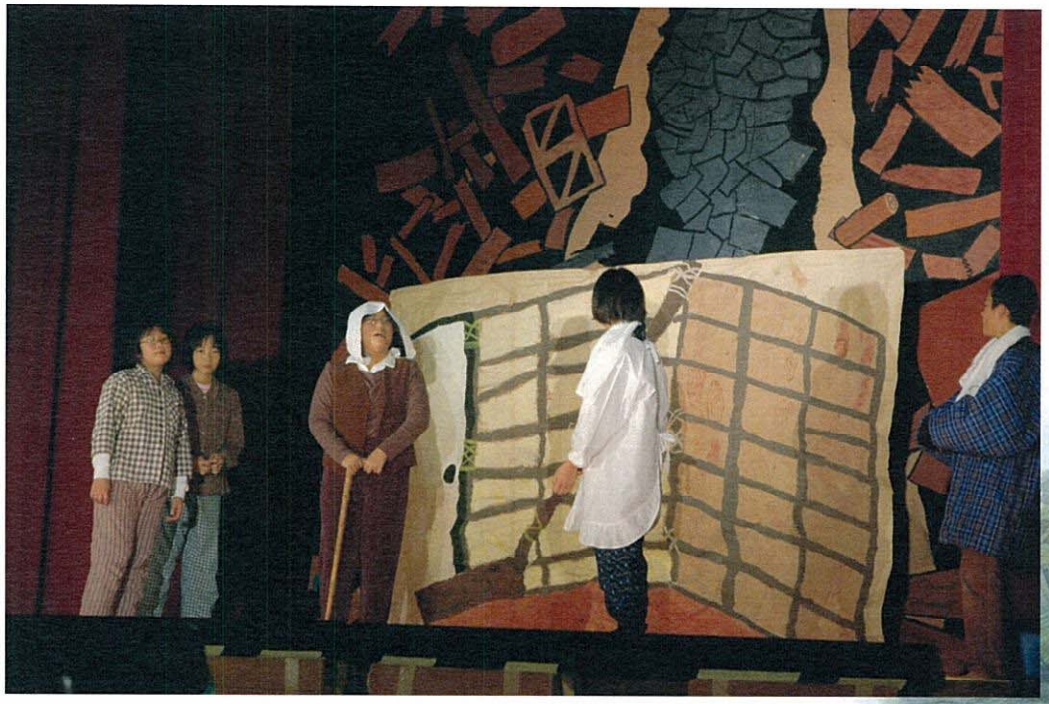
＊あたりから、生き埋めになった人の「助けて、助けて」という声が聞こえてくる。
＊牛の「ウーウー」というううなり声が聞こえてくる。



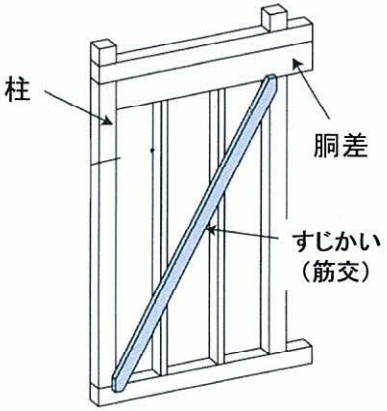
妹１：ほこりでよく見えないけど、「助けて、助けて」って聞こえるよ。
弟：怖いよう。
妹２：あれは牛？苦しそうにうなっているよ。
いとこ：「声が聞こえなくなちゃったよ。死んじゃったのかなあ。」
父３：助けてやりたいが、こっちもそれどころじゃない。
母３：夜中の３時で、火を使っていなくてよかったよ。
祖母２：もし、火を使っている時だったら、木造だし、道は狭いし、道もガレキで埋っているしねえ。全部燃えてしまうところだったよ。
＊裏の家が「ガシャーン」といって転ぶ。
裏の家のおばさん：敏枝さん、火がでてきたで助けて！
敏枝３：おばさん、大丈夫。（バケツで水をかける）
祖母２：敏枝、あれは火じゃないよ。お仏壇が光っているだけだよ。もう、みんなあわててしまって。
父３：小さい子がた、おまえがたわら小屋で布団かぶっとれ。
＊子どもたちは、わら小屋のむしろのところで布団をかぶってふるえてた。

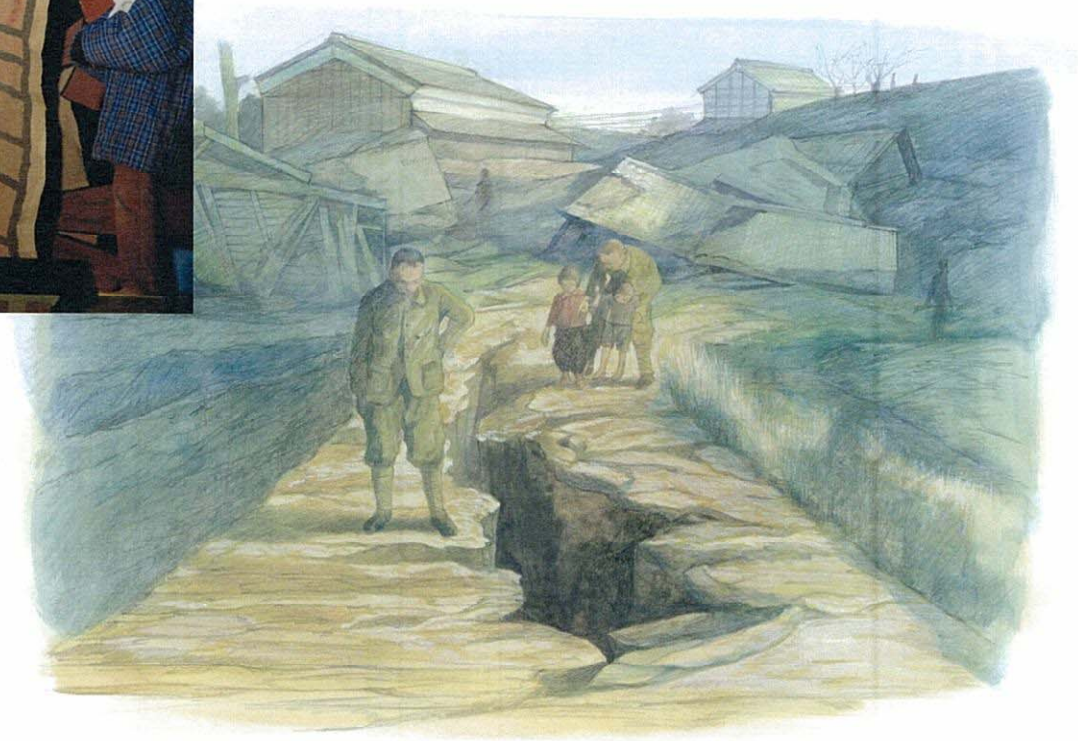
ナレーター（美代３）：あの生き埋めになった人の「助けて」という泣き声と、モワーッとした壁土のほこりとにおい、あれは今でもはっきり思いだすことができる。あれを思いだすと何とも言えんね。
ナレーター（敏枝４）：ただ、最初は「助けて、助けて」って言ってても、何回

筋交いのはいった家



むかしのいえ





3）近所で１軒だけ、地震で倒れなくて無事だった家がありました。なぜ、その家だけ倒れなくて無事だったのでしょうか。

生活を建てなおす

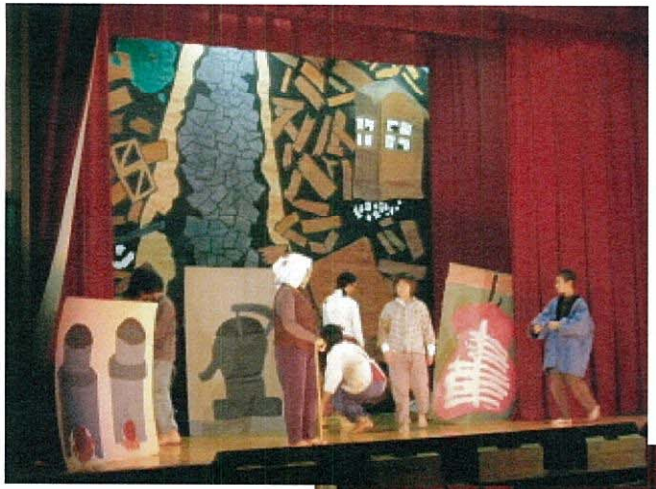
後かたづけ

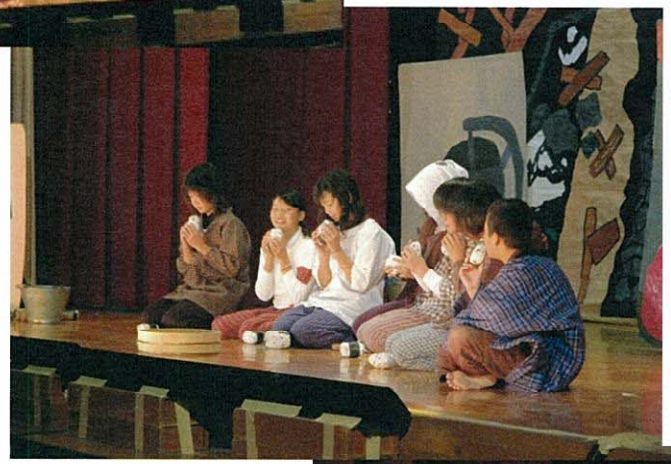
親せきも被災者

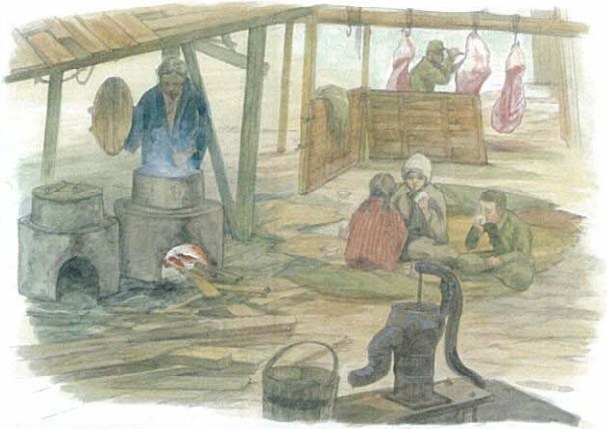
水と食べ物

みんなでご飯

お風呂







わたしたちとお客さんの感想

最後に絵を写しながら合唱

1　聞いた話を実際に演じてみて感じたこと

若の人はおたがい助け合っていいなと思いました。ごえもんぶろも近じょの人がきてもいれていたし、ごはんのときも当番がきたら、ごはんを家族みんなでやっていていいなと思いました。今は、みんなが自分の意見をきちょうして、助け合うことがあまりでこない人を出てくると思います。人を思いやれる人が増えてほしいなと思いました。

1　聞いた話を実際に演じてみて感じたこと

実際に演じてみて本当にこんなことがあったなんて思うと、こわくてこわくて、でもこの大変さとこわさをみんなに知ってもらえてよかったです。この思いを知ればどういう備えをすればいいかわかってもらえたと思います。

お客さん（右下が被災者の敏枝さん・美代さん）

- 連合町内会長「町内にある井戸の総点検を４月以降に行う」
- 家族：家族防災会議の開催と防災ハンドブックの作成

今後の展開（このプランをきっかけに）

１）単元構想図の提案

歴史災害の事例をもとに、災害発生後の時間展開のなかで災害を学ぶ仕組みを考える。

２）防災行動の展開

大人の想像を超える、子どもたちの防災マインド・防災行動について事例を集める。

３）継続的な実施

このプランがきっかけになり、安城市防災課・教育委員会が市のプロジェクトとして来年度以降も継続していく意向。

防災学習「地震に負けない」単元構想　（４２時間完了）

項目（時数）	目標	学習過程	教師支援
問題を見つける　（3）	・地震がいつどこでも起こる可能性があることを知り、自分の問題として感じとることができる。 ・自分が住む地域で過去にあった災害（三河地震）の被災体験を聞くことで自分の地域の問題として感じとることができる。	地震について知ろう ・林能成助教から地震のメカニズムと被災地の街の様子の説明を聞く。 ・和泉町で三河地震に遭遇した鈴木敏枝さん、菅名美代さん姉妹の被災体験を木村玲欧助教の司会進行で聞く。 ・被災体験談の感想と自分の考えをまとめる。 ・大きな地震を体験したことがないけど、話を聞いて地震ってこわいなあと思った。 ・しっかり覚えておきたいです。家族にも教えてあげた。 ・大きな地震は立っことができず、学校へも通えず朝から夜まで片づけるなんてびっくりした。 ・地震がきてもいいように、準備をして、何をすればよいか考えて自分の身を守りたい。 ・防災のことを真剣に考えようという気持ちがでた。	・専門家や被災者の話を直接聞くことで、防災を自分の問題としてとらえるようにする。 ・姉妹への手紙の形式で書くことで感謝の気持ちや感じとったことを相手に伝え、自分の考えを確認できるようにする。
追究する　（15）	・自分たちの学区の人から被災体験の取材をすることで地域の問題として考えをひろげることができる。	自分たちの地域を調べよう ・学区の被災者から話を聞く。 宇頭学区町 ・余震で田んぼを耕す牛が立てなくなって人の手でやった。 ・壊れた家もあり、神社では灯ろうやこま犬が倒れた。 ・家が全壊して、外にわら小屋を造って生活した。 ・地震からお風呂に入れず髪の毛にしらみがわいた。 ・小型の所で布団をしいて、すぐ出られるように着物を着たまま寝転がっていた。 尾崎町 ・昼夜を問わず余震が１年ほど続いた。夜中に余震がくると戸は開かなかった。 姫塚町 ・家の中は家具など固定してなくて、とても危険だった。家の中は危険で外で、３日ぐらいいた。 ・冬のことで、戸がしっかり閉めてあり、なかなか外に出られなかった。朝７時ごろ矢作川の下流の方は全滅だというわさがきた。	・夏休みを利用して、家庭の協力を得ながら行えるようにする。 ・聞き取りが難しい場合は、被災者本人に書いてもらうように助言する。
	・自分の住んでいる町内の様子を地図におとして災害時の行動に生かすことができる。	町別の防災マップづくりをしよう ・道幅はどうなっているか。 ・危険な所はどこか。 ・避難できそうな所はどこか。 ・消火栓や消火器はどこにあるか。 ・病院、コンビニや目標樹 ・体の不自由な人が困る場所	・町内会で作っているものも参考にして、実際に町内を歩いて確かめさせることで、実際の行動にむすびつくものにできるようにする。
	・命を落とす原因調べをし、どうしたら命を落とさないですむか考えることができる。	命を落とす原因を調べよう ・命を落とす原因を予想し、話し合う。 ・ネットで調べる。 ・直接死 下敷きになる（圧死、脳挫傷） 焼死、外傷性ショックなど ・間接死 疲労、ストレス（避難所）、ショック死、自殺、ｴｺﾉﾐｰｸﾗｽ症候群、心筋梗塞など、ほとんどが６０歳以上の高齢者	・予想を出させることで、迷う部分や分からない部分をはっきりできるようにする。
	・今すぐできることは何かを考えることができる。	どんな備えが必要か ・家具の固定 感想 ・自分が思いついた非常持ち出し袋の中身と調べたベテランさんの中身をくらべて、自分のがどんなに少ないか分かった。（非常食の内容、衣服の種類、衛生用品の種類、救急箱の内容、その他あると便利な様々な物）	・被災時や被災後の状況を考え、必要な物を出し合う、その後調べ学習をすることで、自分が予想できなかった物や家族構成や季節によって違うことにも気づくことができるようにする。
表現する　（18）	・大切なことをまとめ、自分の考えをはっきりさせることができる。	大切だと思ったことをまとめよう 内容 ・地震はなぜ起きる、その怖さ ・災害の前と後の生活の違い ・死因（直接、間接）、防ぐには ・あると便利な物、（非常持ち出し品の充実、おすすめ品） ・避難所での生活 感想 ・私は、地震で命を落とす原因と命を落とさないためにできることを調べて、あらためて地震で命を落とすかもしれないと身近に感じるようになりました。私たちはいつくるかわからない地震が、今くるかもしれないといつも考えていないといけないと思った。 ・ぼくは、地震は「備えあれば憂いなし」の言葉が合うと思う。家具を固定する以外にも耐震工事をしたり、非常持ち出し袋を考えたり、いろいろな備えがある。よっぽど強い地震でなければ防ぐことはできると思うが、大きな地震が起きたら、まず冷静になることも大切だと思う。	・今までの学習をまとめてみることで、大切なことややるべきことに気づき、考えをまとめ行動に結びつくようにする。

- 1 -

・自分たちが実際に聞いた被災体験談を劇で再現しすることで、被災者の心情にせまれるようにする。

・専門家が授業に参加することで、被災時の心理や行動を知り、これまでの疑問を解明できるようにする。
・子どもたちの話し合いに、専門家にも入ってもらうことで、疑問や迷いを解決し、はっきりとした行動目標をもつことができるようにする。